

すぐ遊べる!

原寸

百人一首かるた

使い方

最初の10ページが取り札、後ろの10ページが読み札だよ。ダウンロードして印刷して使ってね。厚紙にはり付けると丈夫になるよ。

本書18～19ページを見て、競技かるた、五色百人一首、ちらしどり、坊主めくりなどで遊んでみよう!

ふるくの音声を
使えばひとりでも
練習ができるよ!



カードの見方

取り札



読み札



五色百人一首の分類

取り札にも、読み札にも、20枚ずつ5色(青、ピンク、きいろ、みどり、オレンジ)のハートマークがついているよ。五色百人一首で遊ぶときは、このマークで分けて使ってね。

「五色百人一首」について
もっと知りたい人へ

五色百人一首の全国大会が開催!

小学校低学年から参加できる、五色百人一首の全国大会が行われるよ。参加申し込みについてはここを見てね。各地の大会スケジュールものっているよ!



五色百人一首を買いたい人は

五色百人一首の大会には、協会公認の認定札が使われているよ。認定札は購入もできるから、チャンピオンを目指すなら、一度チェックしてみてもいいかも♪



百人一首は
100首覚えな
ければいけないけど
五色百人一首なら
まずは、20首だけ
覚えればいいんだよ

たった3分
勝負が決まるから
短い休み時間でも
楽しめるよ



わかころも
てはつゆに
ぬれつつ

ころもほす
てふあまの
かくやま

なかなかし
よをひとり
かもぬむ

ふしのたか
ぬにゆきは
ふりつつ

こゑきくと
きそあきは
かなしき

しろきをみ
れはよそふ
けにける

みかさのや
まにいてし
つきかも

なをうちや
まとひとは
いふなり

わかみよに
ふるなかめ
せしまに

しるもしら
ぬもあふさ
かのせき

ひとにはつ
けなあまの
つりふね

をとめのす
かたしはし
ととめむ

こひそつも
りてふちと
なりぬる

みたれそめ
にしわれな
らなくに

わかころも
てにゆきは
ふりつつ

まつとしき
かはいまか
へりこむ

からくれな
るにみつく
くるとは

ゆめのかよ
ひちひとめ
よくらむ

あはてこの
よをすくし
てよとや

みをつくし
てもあはむ
とそおもふ

ありあけの
つせをまぢ
いづるかな

むくやまか
せをあらし
といふらむ

わかみひと
つのおきに
はあらぬと

もみちのに
しきかみの
まにまに

ひとにしら
れてくるよ
しもかな

いまひとた
ひのみゆき
またなむ

いつみきと
てかこひし
かるらむ

ひとめもく
さもかれぬ
とおもへは

おせまとは
せるしらき
くのはな

あかつきは
かりうきも
のはなし

なしののさ
とにふれる
しらゆき

なかれもあ
へぬもみち
なりけり

しつこころ
なくはなの
ちるらむ

まつもむか
しのもな
らなくに

はなそむか
しのかにに
ほひける

くものいつ
こにつきや
とるらむ

つらぬきと
めぬたまそ
ちりける

ひとのいの
ちのをしく
もあるかな

あまりてな
とかひとの
こひしき

ものやおも
ふとひとの
とふまで

ひとしれす
こそおもひ
そめしか

すゑのまつ
やまなみこ
たしとは

むかしはも
のをおもは
さりけり

ひとをのみ
をもうらみ
たらまし

みのいたつ
らになりぬ
へきかな

ゆくへもし
らぬこひの
みちかな

ひとこそみ
えねあきは
きにけり

くたけても
のをおもふ
ころかな

ひるはきえ
つつものを
こそおもへ

ながくもか
なとおもひ
けるかな

さしもしら
しなもゆる
おもひを

なほうらめ
しきあさほ
らけかな

いかにひさ
しきものと
かはしる

けふをかき
りのいのち
ともかな

なこそなか
れてなほき
こえけれ

いまひとた
ひのあふこ
ともかな

くもかくれ
にしよはの
つきかな

いてそよひ
とをわすれ
やはする

かたふくま
てのつきを
みしかな

またふみも
みすあまの
はしたて

けふここの
へににほひ
ぬるかな

よにあふれ
かのせきは
ゆるさし

ひとつてな
らていふよ
しもかな

あらはれわ
たるせせの
あしろき

こひにくち
なむなこそ
をしけれ

はなよりほ
かにしるひ
ともなし

かひなくた
たむなこそ
をしけれ

こひしかる
へきよはの
つきかな

たつたのか
はのにしき
なりけり

いつこもお
なしあきの
ゆふくれ

あしのまろ
やにあきか
せそふく

かけしやそ
てのぬれも
こそすれ

とやまのか
すみただす
もあらなむ

はけしかれ
とはいのら
ぬものを

あはれこと
しにあきも
いぬめり

くもるにま
かふおきつ
しらなみ

われてもす
急にあはむ
とそおもふ

いくなねさ
ぬぬすまの
せきもり

もれいつる
つきのかけ
のたやけた

みたれてけ
さはものを
こそおもへ

ただありあ
けのつきそ
のこれる

うきにたへ
ぬはなみた
なりけり

やまのおく
にもしかそ
なくなる

うしとみし
よそいまは
こひしき

ねやのひま
さへつれな
かりけり

かこちかほ
なるわかな
みたかな

まりたちの
ほるあきの
ゆふくれ

みをつくし
てやこひわ
たるへき

しのふるこ
とのよはり
もそする

ぬれにそぬ
れしいろは
かはらす

ころもかた
しきひとり
かもねむ

ひとこそし
らねかわく
まもなし

あまのをふ
ねのつなて
かなしも

ふるさとを
むくころも
うつなり

わかたつそ
まにすみそ
めのそて

ふりゆくも
のはわかみ
なりけり

やくやもし
ほのみもこ
かれつつ

みそきそな
つのしるし
なりける

よをおもふ
ゆゑにももの
おもふみは

なほあまり
あるむかし
なりけり

天智天皇
秋の田の
かりほの庵の
とまをあらみ
わが衣手は
露にぬれつつ



持統天皇
春過ぎて
夏来にけらし
白妙の
衣ほすてふ
天の香具山



桐本人麿
足引きの
山鳥の尾の
しだり尾の
ながながし夜を
ひとりかもねむ



山辺赤人
田子の浦に
打出でてみれば
白妙の
ふじの高嶺に
雪は降りつつ



藤原大友
奥山に
紅葉ふみ分け
なく鹿の
声きく時ぞ
秋は悲しき



中納言家持
かささぎの
渡せる橋に
おく霜の
しろきを見れば
夜ぞふけにける



安倍仲麻呂
天の原
ふりさけ見れば
春日なる
みかさの山に
出でし月かも



喜撰法師
わが庵は
都のたつみ
しかぞ住む
世をうち山と
人はいふなり



小野小町
花の色は
移りにけりな
徒に
我が身世にふる
ながめせしまに



嵯峨丸
これや此の
行くも帰るも
別かれては
知るも知らぬも
逢坂の関



参議 蟹
わたの原
八十島かけて
漕ぎ出でぬと
人にはつげよ
あまの釣舟



僧正 遍昭
天つ風
雲のかよひぢ
吹きとぢよ
をとめの姿
しばし留めむ



勝成院
筑波嶺の
峯より落つる
みなのか
恋ぞつもりて
淵となりぬる



河原左大臣
陸奥の
しのぶもちずり
誰に
みだれ初めにし
我ならなくに



光孝天皇
君がため
春の野に出でて
若菜つむ
わが衣手に
雪は降りつつ



中納言 行平
立別れ
いなばの山の
嶺におふる
まつとし聞かば
今帰り来む



在原業平 朝臣
ちはやぶる
神代も聞かず
龍田川
から紅に
水くくるとは



藤原敏行 朝臣
住の江の
岸による浪
よるさへや
夢の通ひ路
人目よくらむ



伊勢
難波潟
短き葦の
ふしのまも
あはで此の世を
すぐしてよとや



元良親王
詫びぬれば
今はた同じ
難波なる
みをつくしても
逢はむとぞ思ふ



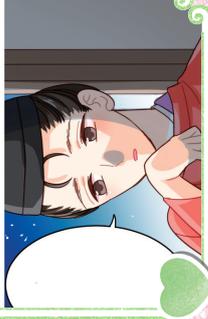
今来むと
いひばかりに
長月の
有明けの月を
待ち出でつるかな



吹くからに
秋の草木の
しをるれば
むべ山風を
あらしといふらむ



月見れば
千々に物こそ
悲しけれ
わが身ひとつの
秋にはあらねど



此の度は
幣もとりあへず
手向山
紅葉の錦
神のまにまに



名にしおはば
逢坂山の
さねかつら
人にしられで
くるよしもがな



小倉山の
峯のもみぢ葉
心あらば
今ひとたびの
みゆき待たなむ



みかの原
わきて流るる
泉川
いつみきとてか
恋しかるらむ



山里は
冬ぞ寂しさ
まさりける
人目も草も
かれぬと思へば



心あてに
折らばや折らむ
初霜の
置きまどはせる
白菊の花



有明けの
つれなく見えし
別れより
暁ばかり
憂きものはなし



坂上是則
朝ぼらけ
有明けの月と
見るまでに
吉野の里に
降れる白雪



春道列樹
山がはに
風のかけたる
しがらみは
流れもあへぬ
紅葉なりけり



結方則
久方の
光のどけき
春の日に
しづこころなく
花の散るらむ



藤原暁風
誰をかも
知る人にせむ
高砂の
松も昔の
友ならなくに



紀貫之
人はいさ
心もしらず
ふるさとは
花ぞ昔の
香にはひける



清原深養父
夏の夜は
まだ宵ながら
あけぬるを
雲のいづこに
月宿るらむ



文房朝康
白露に
風の吹きしく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞ散りける



有近
忘らるる
身をば思はず
誓ひてし
人の命の
惜しくもあるかな



参議等
浅茅生の
小野の篠原
しのぶれど
あまりてなどか
人の恋しき



平兼盛
恐ぶれど
色に出でにけり
我が恋は
ものや思ふと
人の問ふまで



壬生恵見
恋すてふ
わが名はまだき
立ちにけり
人知れずこそ
思ひそめしか



清原元輔
契りきな
かたみに袖を
しぼりつつ
末の松山
浪こさじとは



権中納言眞忠
逢ひみての
後の心に
くらぶれば
昔はものを
思はざりけり



中納言朝忠
逢ふことの
絶てしなくは
なかなか
人をも身をも
恨みざらまし



謙徳公
哀れとも
いふべき人は
おもほえて
身のいたづらに
なりぬべきかな



會權好忠
由良の門を
わたる舟人
梶をたえ
行方もしらぬ
恋の道かな



惠魔法師
八重葎
しげれる宿の
さびしきに
人こそ見えね
秋はきにけり



源重之
風をいたみ
岩うつ浪の
おのれのみ
砕けてものを
思ふ頃かな



大中臣能宣朝臣
御垣守
衛士のたく火の
夜はもえ
昼は消えつつ
ものをこそ思へ



藤原義孝
君がため
惜しからざりし
命さへ
長くもがなと
思ひけるかな



藤原実方朝臣

かくとだに
えやはいぶきの
さしも草
さしも知らじな
もゆる思ひを



藤原道信朝臣

明けぬれば
くるるものとは
知りながら
なほ恨めしき
朝ぼらけかな



右大将連綱母

嘆きつつ
独りぬる夜の
明くるまは
いかに久しき
ものとかは知る



備前三司母

忘れじの
行末までは
難ければ
今日を限りの
命ともがな



大納言公任

瀧の音は
たえて久しく
なりぬれど
名こそ流れて
なほ聞えけれ



和泉式部

あらざらむ
此の世のほかの
思ひ出に
今一たびの
逢ふこともがな



紫式部

廻り逢ひて
見しやそれとも
わかぬまに
雲がくれにし
夜半の月かな



大式三位

有馬山
ゐなのささ原
風吹けば
いでそよ人を
忘れやはする



赤染衛門

やすらはで
寝なましものを
小夜更けて
傾くまでの
月を見しかな



小式部内侍

大江山
いくのの道の
遠ければ
まだふみも見ず
天の橋立



伊勢大輔
古の
奈良の都の
八重ざくら
今日九重に
匂ひぬるかな



清少納言
夜をこめて
鳥のそら音は
はかるとも
世に逢坂の
関はゆるさじ



左京大夫道雅
今はただ
思ひ絶えなむ
とばかりを
人づてならで
言ふよしもがな



権中納言是頼
朝ぼらけ
宇治の川霧
絶えだえに
あらはれ渡る
瀬々の網代木



相模
恨みわび
ほさぬ袖だに
あるものを
恋に朽ちなむ
名こそ惜しけれ



前大僧正行尊
諸共に
あはれと思へ
山ざくら
花よりほかに
知る人もなし



周防内侍
春の夜の
夢ばかりなる
手枕に
かひなく立たむ
名こそ惜しけれ



三秦院
心にも
あらで憂き世に
ながらへば
恋しかるべき
夜半の月かな



能因法師
嵐ふく
三室の山の
もみぢ葉は
龍田の川の
錦なりけり



良運法師
寂しさに
宿を立ち出て
眺むれば
いづこも同じ
秋の夕暮



大納言 藤信
夕されば
門田の稲葉
おとづれて
あしのまるやに
秋風ぞ吹く



祐子内親王家 紀伊
音に聞く
高師の浜の
あだ浪は
かけじや袖の
ぬれもこそすれ



権中納言 匡房
高砂の
尾の上の桜
咲きにけり
外山の霞
立たずもあらなむ



源俊頼 朝臣
うかりける
人を初瀬の
山おろし
はげしかれとは
祈らぬものを



藤原基俊
契りおきし
させもが露を
命にて
あはれ今年の
秋も去ぬめり



法性寺入道 前白太政大臣
わたの原
漕ぎ出でて見れば
久方の
雲居にまがふ
沖つ白浪



崇徳院
瀬を早み
岩にせかるる
瀧川の
われても末に
逢はむとぞ思ふ



源善書
淡路島
かよふ千鳥の
鳴く声に
いくよ寢覚めぬ
須磨の関守



左京大夫 顕輔
秋風に
たなびく雲の
絶間より
もれ出づる月の
影のさやけさ



待賢門院 堀河
ながからむ
心も知らず
黒髪の
みだれて今朝は
ものをこそ思へ



後徳大寺左大臣
ほととぎす
鳴きつる方を
眺むれば
ただ有明けの
月ぞ残れる



道因法師
思ひわび
さても命は
あるものを
憂きに堪へぬは
涙なりけり



皇太后宮大夫俊成
世の中よ
道こそなけれ
思ひ入る
山の奥にも
鹿ぞなくなる



藤原清輔朝臣
ながらへば
また此の頃や
しのばれむ
憂しと見し世ぞ
今は恋しき



俊重法師
夜もすがら
もの思ふ頃は
明けやらで
ねやのひまさへ
つれなかりけり



西行法師
嘆けとて
月やはものを
思はする
かこち顔なる
わが涙かな



寂蓮法師
村雨の
露もまだひぬ
真木の葉に
霧立ちのぼる
秋の夕暮れ



皇嘉門院別当
難波江の
あしのかりねの
一夜ゆるる
みをつくしてや
恋わたるべき



式子内親王
玉の緒よ
たえなば絶えね
ながらへば
恐ぶることの
弱りもぞする



殿富門院大輔
見せばやな
雄島のあまの
袖だにも
濡れにぞ濡れし
色はかはらず



後京極攝政前太政大臣
しこうきょくしやうせいぜんたうせいだいじん

きりぎりす
なくや霜夜の
さむしろに
衣かたしき
独りかも寝む



二条院讃岐
にじょういんさんぎ

わが袖は
潮十に見えぬ
沖の石の
人こそ知らね
乾く間もなし



鎌倉右大臣
かまくらみぎだいじん
世の中は
常にもがもな
渚こぐ
あまの小舟の
綱手かなしも



参議雅経
さんぎみやへつね
みよし野の
山の秋風の
小夜更けて
故郷寒く
衣うつなり



前大僧正慈円
ぜんだいそうじょうじゆん
おほけなく
うき世の民に
おほふかな
我が立つ榊に
墨染の袖



入道前太政大臣
にゅうだうぜんたうせいだいじん
花さそふ
あらしの庭の
雪ならで
ふりゆくものは
我が身なりけり



権中納言定家
ごんちゆうなごんじやうけ
来ぬ人を
松帆の浦の
夕なぎに
焼くや藻塩の
身もこがれつつ



従二位家隆
じゆにいけいりゆう
風そよぐ
檜の小川の
夕ぐれは
みそぎぞ夏の
しるしなりける



後鳥羽院
ごとりうえいん
人もをし
人もうらめし
あぢきなく
世を思ふ故に
もの思ふ身は



順徳院
じゆんとくえいん
百敷や
古き軒端の
しのぶにも
なほあまりある
昔なりけり

